

アメリカの作家と旧世界

——エマソン、トウエイン、ジェイムズに於ける無垢の変容——

井戸 桂子*¹⁾

American Writers and the Old World

——Emerson, Twain and Henry James——

Keiko Ido

ABSTRACT

From their nation's founding Americans considered their country a "Virgin Land", innocent of Man's crimes, while viewing Europe as a corrupt world soiled by Man's civilisation. Even after their political independence, Americans still felt that their traditional culture including literature belonged to the Old World.

Especially from the 1830's, however, American writers began to seek intellectual and literary independence from the Old World. Nevertheless their efforts toward creating their own literature led them to become aware of the fall of their "Virgin Land", i. e. to be forced to change their notion of "innocence".

We shall examine three examples showing this transfiguration of "innocence".

Emerson's lecture in 1837, "The American Scholar" was hailed as the first example of "Intellectual Independence". It caused a sensation, but Emerson himself felt dissatisfied with the actual situation in America and yearned, from time to time, for European Culture. Therefore we must recognize that his great confidence for the New World, the innocent land, was subject to personal vacillation.

In *The Innocents Abroad* (1869), Mark Twain, being innocent as an American, frankly criticised what he saw, with his own eyes, in Europe and Jerusalem, but returning to America he noticed that instead of receiving God's grace, he found himself soiled by Man's knowledge, culture. But this very consciousness allowed him to seek a newly transfigured innocence, the possibility of rebirth.

Although Henry James came to Paris in 1876 with a determination to settle down there, he passed his days in disappointment, and finally moved to England where he stayed for years. But this experience in Paris made him write *The American*, in which James contrasted Europe and America. At the end of this novel he described how the hero, Newman, by "a sort of somersault", found himself in a new transfigured innocence which combined a moral purity with a much more complex spiritual and

*¹⁾ 放送大学助教授 (外国語)

emotional experience, including a sense of the absurdity of not knowing why he made the choices which he had. In this work the author also invents a new literary technique, the absence of the writer.

In these ways, Emerson, Twain and James encountered the Old World and sincerely struggled with it. In the process they developed their own notions of the New World and “innocence”.

I. ヨーロッパ人のアメリカ観とアメリカ人のヨーロッパ観

十六世紀、地理上の発見の時代以来、ヨーロッパ人は、「新世界」アメリカについて様々なイメージを抱き続けている。それは、ヨーロッパ人の期待と不安、夢と悪夢、憧れと嫌悪を反映する、相反するイメージであった。アメリカの広大な土地は、一方では願いをすべて約束してくれる豊かな楽園として、つまり何世紀も夢みてきた楽園、エデンとしてヨーロッパ人の憧れの的であり、一方では、人跡未踏の森林と鋤を一切受けつけない荒地として、恐怖を与える漠たる自然であった。また、独立を勝ち得てからの合衆国の政体は、自由平等を具現化した民主主義国家として理想化される一方、暴民の支配をも招きかねない俗物根性の放縦な体制として軽蔑されてもいた。十九世紀の、ことに1830年代からの急激な産業の発展は、豊かさをもたらすものとして歓迎され、人類の止むことのない進歩に対する信仰を生み出す一方、物質主義と拝金主義の文明で高尚な芸術は有さないといい反発を受ける。こうした相反する評価の続く中、あえて一言でいえばヨーロッパの大衆はアメリカに夢を求めて移民として渡米し、ヨーロッパにとどまり続ける人々は旧大陸から冷やかに批判し嘲笑したといえよう。

そして、私達の関心事である文学についていえば、十九世紀中葉になっても、アメリカには国民文学は生まれていないと、ヨーロッパ人に判断される。例えば、トクヴィルは『アメリカに於ける民主主義について』(1840)で、アメリカの作家はヨーロッパ、ことにイギリスの傘下にある故に「厳密にいうと合衆国の住民はまだ文学を持っていない¹⁾」と断言するし、批評家シャルルは「北アメリカの文学について」(1835)で「合衆国には美しい都会も、立派な港も、盛んな商業も、すばらしい船舶もあるのに、文学は少しもない²⁾」と嘆く。十九世紀のヨーロッパの眼からみれば、アメリカには、旧大陸にあるような、歴史の重みも、豊饒たる文学も、荘麗な美術もないのである。そしてかの国の芸術は、いまだに我がヨーロッパ文明の支配下にあるというわけである。



それでは十八世紀後半から十九世紀当時のアメリカ人は、自らの国とヨーロッパとを、どのように対比して考えていたであろうか。それは敢えて一言でいえば、楽園 vs 文明、あるいは無垢 vs 墮落ともとらえられる。

アメリカ人のアメリカ意識の中に深く根をおろしているものに、アメリカを無垢の楽園^{エデン}とみなし、そこではヨーロッパの文明や制度や伝統に毒されることのない、自然のままの生活を営むことができるという、「庭園の神話」がある。それは、汚れをしらない緑色の農場の静かな土地というイメージであり、実はもとをただせば、ヨーロッパ人のアメリカ

へのプラスイメージ、即ち、ヨーロッパ人がアメリカに賭けた夢に溯るのである。そして、ジェファソンの「大地で働く者は、神によって選ばれた民である」という有名な言葉や、クレーヴクール『あるアメリカ農夫の手紙』(1782)では、アメリカはヨーロッパとは違った、エデン的特性を有することが表明されている。もう少し文学作品の中にこの「庭園の神話」を探してみれば、まず十八世紀後半の詩人フィリップ・フレノーは、『立ちのぼるアメリカの栄光』(1771)、『コロンブスの肖像』(1774)³⁾と題する愛国詩の中で、アメリカを、「無垢と安楽にあふれた、甘やかな森の風景」に、「天国から送りこまれた新しいイエルサレム」が出現する地として歌いあげ、一方、ヨーロッパは「苛酷な法律を施行し、正当な自由をおしつぶす」ところである、と非難する。「神と自然が支配している」のがアメリカで、一方、神と自然の作品が「人間の手で汚されている」のがヨーロッパであった。一言で換言すれば、汚れなき無垢のアメリカに対して、人間の文明によって墮落したヨーロッパという対比になるであろう。もう一例をアーヴィングにも探してみよう。1815年から32年にかけてヨーロッパ各地に滞在し、ヨーロッパで認められた作家としてアメリカに観迎されたアーヴィングではあるが、彼の中にすら、「庭園の神話」を発見できる。例えば『スケッチ・ブック』(1819-20)の「スリーピー・ホロウの伝説」や「リップ・ヴァン・ウィングル」では、文明に対する自然、ヨーロッパ文明に毒されたみじめな現実に対する、アメリカの原初の夢への郷愁、という無垢なる楽園アメリカが求められている。

しかし、この「庭園の神話」に由来する当然の帰結として、人間が嘗々と築いてきた文明は専らヨーロッパのものであり、無垢なるアメリカには文化的空白があるという事実が歴然と生ずる。文明により墮落しているとはいえ、ヨーロッパには継承されていく重厚な過去があり、一方、汚れなき大地とはいえ、アメリカには平板な現在が広がるのみで、未だ精神的にはヨーロッパの支配下にあるのである。これは、ヨーロッパ人が優越観をもってアメリカをみるときのイメージと共通するが、当のアメリカ人達も、十九世紀前半までは、ヨーロッパの翼下にあるこうした自らの精神世界を認めざるを得なかったのである。先のアーヴィングも、ヨーロッパは蓄積された詩的連想の魅力を発散している故にそこに「心の故郷」を感じるが、一方アメリカでは、ひしめき合う雑踏の中を万人に疎んぜられ、成り上がりものどもに押しつけられるので「生まれ故郷にありながら、異邦人」という違和感をおぼえる。ホーソンも『大理石の牧神像』(*The Marble Faun*, 1860)の序文で「白昼の単純な光の中での平凡な繁栄以外の何ものでもない」アメリカでは文学は物しにくく、「物語と詩、つたと苔と壁に咲く花は、それを成長させるための廃墟を必要とするだろう」と述べる。ここには、旧世界ヨーロッパに於てだけ花ひらく文芸という考え方がみられる。

このように、汚れなき無垢を求めつつも、その文化的空白は嘆かざるを得ないという、アメリカ意識—ヨーロッパと対比した場合のアメリカ意識—が浮かびあがってくる。そして、この葛藤ともいえるアメリカの自己発見は、1830年代より、即ち既に国情の落ち着きを見、すぐれた才能が国民文化の確立に漸くエネルギーを注ぎ始めた頃より、明確化してくるといえる。それは、汚れなき楽園のアメリカが、精神的にもヨーロッパから独立し、自らの精神界を築いていこうと切に願う、自己発見の動きである。しかし、この願

は、まさしく、文明を作ることでもあり、自らもヨーロッパのように墮落していく危険性をはらむ、という矛盾を含んでいる。つまり、無垢なる庭園の神話が崩壊していくことなのである。文化の独立を願うことが、自らの無垢を捨てさせる結果となるのである。

本小論では、十九世紀のアメリカの作家達が直面した、無垢の変貌、あるいは無垢からの覚醒という観点から、彼らの旧世界観、ヨーロッパと対比させた場合のアメリカ意識を考察したい。まず、知的独立を高らかに宣言したエマソンから、客観的な眼でヨーロッパ旅行記を綴ったマーク・トウェイン、さらに小説としては、ヘンリー・ジェームズの『アメリカ人』までを対象とする。ことにトウェインとジェームズの場合は、彼らのフランス観を中心としてたどる。なぜなら、普通、アメリカ人の旧世界との対比というとイギリスとの関係が扱われるが、憧れの点ではフランスも忘れてはならない対象国であり、彼らの英国への母国意識とは違った旧文明観が発見できると思うからである。

II. エマソンの『アメリカの学者』

十九世紀前半のアメリカ文学は、いかにして旧世界の翼下から飛びたつかを模索した時代である。ことに1830年代は、旧世界、とりわけイギリスからの離脱を求める声が高まっていったが、その声の代表ともいえ、また当時、一種のセンセーションも巻き起こした、エマソンの講演『アメリカの学者』(“The American Scholar”)を、まず取り上げたい。そしてこの講演で建国の時代精神を高らかにうたい、無垢の国アメリカに自信を持っていたはずのエマソンに於ても、実は日記などではその自信にかげりを見出さざるを得ないことを指摘したい。

II.1. 「知性の独立宣言」としての『アメリカの学者』

1837年8月31日、エマソンは、ファイ・ベータ・カッパ協会(The Phi Beta Kappa Society)一合衆国最古の大学卒業生社交クラブのことで、毎年卒業期に弁士を招き講演会を催す一のハーヴァード大学支部の例会に於て、一時間余りの講演を行なった。それは『アメリカの学者』と題するもので、冒頭、ヨーロッパに従属してきたアメリカの学芸がいまや新しい時代を迎えようとしていることを宣言する。「私達の依存の時代、他国の学問に対する私達の長い徒弟時代⁴⁾がいまや終焉しようとしていること宣言する。即ち、他のどこの国でもない自分たちの新しい国、アメリカの学者の使命を、当時の知識人の卵達に対して宣言したのである。

その内容を要約すれば、学者とは「考える人間」である。学者は墜落してしまうと「他人の思考をくり返す鸚鵡」になる。そのあるべき姿とは、第一に、自然現象と人間自身の魂とは同じ根から出ているから、自然を理解すること、第二に、過去の精神の最上の見本である書物に対して、学者は本の虫とならぬよう、即ち道具に服従せぬよう注意し、創造的靈感を与えるものとしてのみ利用すること、第三に、学者は隠遁者や虚弱者であってはならず、行動を伴った、態動的な靈魂を持つこと、という具合に、自然、書物、行動の三点から学者の訓練を説く。そこには、エマソン本来の思想の核心にふれるものがあるが、同時に新旧両世界を対比した意識が投影されている。まず、神と自然と人間との対応関係

についてエマソンが抱く、人間の精神に対する絶対的な自信には、新しい国に於ける人間に向けての楽天主義がうかがえるし、第二点では、自分自身は相当な読書家であったエマソンが、「書物の害」をも指摘して、過去の精神への執着に対する警告がみられ、第三点では、行動の価値を力説しアメリカ人的な経験主義、後のアメリカのプラグマティズムにつながるものが発見される。そして続けてエマソンは、学者はあくまでも自由と自己信頼を持つべきであるし、身近なもの、つまり現代を研究することによって未来への希望を人々に与えることができると説く。さらに最後にもう一度、「私達はあまりにも長くヨーロッパの優雅な詩神に耳をあずけすぎた。アメリカの自由人の精神は、臆病で、模倣好きで、覇気に欠けるのではないかと、すでに疑われ始めている⁵⁾」と、“アメリカの”学者をヨーロッパに対抗して奮い立たせ、「学者は知識の総合大学である⁶⁾」との自信を持つよう勧め、「自分の足で歩き、自分自身の手で仕事をする⁵⁾」こと呼びかけて、講演を終える。このように、エマソンは、人間と自然が一体であり、すべてのものの根源である精神が学者の心に宿り、かつ、自分の思想は万人の思想と共通であると確信していた。そしてアメリカの学者がこの義務をこそ果たせば、ヨーロッパの学問への隷属から独立できる、と確信していた。これは、まさに、当時のアメリカ民主主義の展望に基いた、換言すれば、時代の使命感にあふれた、高らかな宣言であるといえよう。

それでは、エマソンのこの自信はどこから由来するのであろうか。それは一つには個人的な理由として、この講演に先立つこと4年前に行なったヨーロッパ旅行の、「成果」が挙げられる。いま、「成果」と記したが、これは実は、逆説的な意味である。牧師も辞し一切を捨てたも同然の30歳エマソンは、1832年クリスマスの日に出立、33年2月マルタ島到着後、イタリア、スイスを経て6月末パリに着き、8月イギリスに渡り9月4日帰国の途につくという、9ヶ月間のヨーロッパ滞在を経験した。しかし、まだ名もなく、文人ですらもない彼の貧窮旅行の中、パリの植物園で、ものと精神との対応関係についての啓示を得たことと、英国でカーライルに直接会って心を通じあわせたことぐらいが特筆すべき収穫で、むしろ他の点では、失望の方が多かったのである。即ち、旧世界からは学ぶことが少ないということの発見と、アメリカ人としての誇りの自覚とを、ヨーロッパ旅行を通して、逆説的ではあるが、得たのである。彼がアメリカの旧世界に対する優位性を声高に主張しえたのは、この失意のヨーロッパ旅行を経たおかげであった⁷⁾。もう一つの理由は、当時のニューイングランドの思潮に対して反発する動きがエマソンの周囲でもみられ始めたことである。まず、何事にも英国の風を学ぼうとするニューイングランドは、主にオランダやドイツの系統を継ぐ中西部からみれば、アメリカ特有の文化の自覚に欠け、それを覚醒させる人が待ち望まれていた⁸⁾。エマソンは、英国を範とする因襲的眠りに対する、いわば自覚の役目を仕事としたのである。また宗教界では、ピューリタン主義が独占する壇上にユニテリアン思想が登場し、ハーヴァードさえその苗床となる勢いであった。前者の性悪説に対して後者は性善説を、画一主義に対して個人主義を、文学に於ける古典主義に対してロマン主義を唱えた。エマソンの人間個人に対する楽天的ともいえる自己信頼は、ユニテリアン思想のこの新しい動きと無縁ではない。このように、エマソンのこの講演『アメリカの学者』は、彼が温めていた主張、即ちアメリカの独自性の鼓舞が、当時の新しい気運に迎え入れられるよう、ちょうど時と場所を得たものであった。まさに

正鵠を射るものであった。

実際、その評判はセンセーショナルであった。講演会には二百名を越す聴衆が集まっていた。ハーヴァードの学生はもちろんのこと、ユニテリアンの人々、そして若きロウエル、ホームズらが出席していた。彼らの感動は想像できよう。「集まった聴衆たちの息も止まるばかりの興奮、熱烈な拍手の響で窓もふるえ、賛意の情熱がほとばしり、時代遅れの反対者たちは、何も言えなかった！⁹⁾」とローウェルはその場の様子を伝え、後には彼自身の講演『わが国の文学』の中で、エマソンの単純さと質素を追求した生涯を、「真にアメリカ的なもの」として支持する。ホームズも、この講演を「知的独立宣言⁹⁾」と断定し、「聴衆は誰もこの講演を忘れない」と述べる。これら二人から、つまり、後年十九世紀中葉から後半にかけてニューイングランド文化の教養に大きな影響力を持ったいわば保守的な知的指導者達から、こうしたエマソン評価を聞くのは意外なことかもしれないが、それだけに一層、1837年当時弱冠18歳と28歳の若者として彼らが受けたこのエマソンの講演の衝撃的印象が、いかに深く、生涯忘れ得ないものであったかが、うかがいしれるのである。また、翌38年7月にはエマソンは、ハーヴァード大学神学部卒業予定クラスのために招かれ、講演を行ない、宗教界に痛烈な批判を浴びせてまたもや深刻な衝撃を与えることとなるが、そもそも彼を招待するに至った理由には、この『アメリカの学者』の講演のまきおこしたセンセーションがあげられる。37年の講演の折の依頼は、予定していた講演者が断わってきたための代役であったが、38年は、当初よりエマソンを予定していたのであるから、講演者としてのいわば格上げがなされたのである。もっとも、この神学部講演はあまりにも過激で異端ともおそれられたので、保守的教授側は招いたのはあくまでも学生であり自分達には責任がないとしたのであるが…。

こうして、この『アメリカの学者』は、時代の使命感に満ちた高らかな「知的独立宣言」となり、文人として歩み始めたエマソンにとっても、またその後のアメリカ文学にとっても、重大な影響を与えることとなった。そして彼の「自己信頼」の思想に対する自らの確信は深まっていくが、では、エマソン自身は、彼の周囲のアメリカについて、アメリカの現状について、その自信にみられるように満足していたのであろうか？ヨーロッパから独立して、新たな学芸の国を建設するのは、容易であると考えていたであらうか？新しい無垢の国として、墮落した文明から完全に離脱することができると考えていたのであろうか？次に、この宣言をした頃のエマソンのアメリカ現状認識とヨーロッパ観を探って、この質問に対して、そう簡単に答えられない、いや答えはむしろ否定的であることを述べたい。

II.2. エマソンの欧米間の逡巡

エマソンは、アメリカの現状を、アメリカ人をどのようにみていたのであろうか。アメリカ人としての誇りを自覚し、新しい時代の新しい思想を求め、「ここ、今」(the Here and the Now)の重要性を説くエマソンである。しかし、結論からいうと、彼はアメリカの現状が最上のものとは認めていないし、むしろ、不満である。彼は真にアメリカ的な芸術家の出現を期待しているにもかかわらず、その可能性の希薄なことを嘆き、苦悩する。

例えば、講演『アメリカの学者』で高らかにアメリカの知的独立を宣言したはずのこの時期の日記を幾つかひもといってみよう。そこには期待よりも幻滅がみられる。まず、36年9月の日記である¹⁰⁾。「この国の芸術にはなぜ天才がないのか」と自問し、詩ではブライアント、小説ではアーヴィング、クーパーの名を挙げた後「すべてにおいて女性的、特徴なし」と断定し、その理由を二つ述べる。その第一は、「ヨーロッパ、主としてイギリスの影響。あらゆる天才は天才にとって致命的である。近よりすぎではいけない。遠ざかっている。」と、ヨーロッパの翼下にいる限り天才の出現の不可能であることを述べる。これは、先にみた講演のもととなる考え方である。しかし、次に挙げる二つめの理由は、当のアメリカへの不満である。即ち、「この国の芸術は国民の必要によって呼び求められていない。(…) いったい誰がブライアントの詩を、グリーンノーの彫像を、オールストンの絵をみたがるか。それらは国民の眼中にはない。民族の心は別の方向に向いている。――財産に向いている。」と述べる。当の国民の心が拝金主義になり、芸術を待望していない状況では、天才も生まれてこないという苦悩である。もう一例、38年6月の日記¹¹⁾にも、2年前と同じ調子の嘆きがある。「ああ、わが祖国よ！ 汝に於いては、人類が持つて当然の希望が実現されていない。(…) 汝が今までに生み出したものは、せいぜい、オールストン、グリーンノー、ブライアント、エヴァレット、チャニング、アーヴィングにみられる、美を愛する心、とはいっても、それは取るに足らないものだし、優雅を愛する心、とはいっても、それは模倣にすぎない。」と述べる。そして数年後の44年の『エッセー第二集』の中の『詩人』¹²⁾(*The Poet*) に於ても、理想どおりの「詩人」は実際にはなかなか見つからない状態が続くという。即ち彼によれば、「われわれに備わる比類ない資材の価値を知り、(…) 神々の演じる祭典が、現代の野蛮で物質ばかり尊重する風潮の中でも行なわれていることを見てとるような、昂然たる目をそなえた天才は、まだアメリカには出ていない。」しかも「アメリカは我々の目には一編の詩であり、その広大な地形は想像力をめくるめく思いにする」のに、である。エマソンはまたしてもこのエッセイの終わり、どうか詩人はいっさいの疑念を捨てて、挫けることなく頑張ってほしいと力づけるのみである…。このように、最初のヨーロッパ旅行を終えてから、アメリカに対する誇りを持ち、自己信頼を深めて、古い時代から新しい時代への展望に期待をもって精力的に活動していた時期に於て、すでに、エマソンのアメリカの現状に対する不満、幻滅が、表向にはないにしろ、発見されるのである。

それでは、旧世界、ヨーロッパについて、エマソンはどうみていたのだろうか。彼はまず、ヨーロッパは過去の意識の代表である故に、それを断ち切ることを提唱する、否定的見方が強く前面にでている。『アメリカの学者』での宣言、あるいはそれに一年先立つ『自然』(*Nature*)の冒頭での有名な書き出し―「我々の時代はふり返ってばかりいる。(…) 我々だとて過去の干からびた白骨のなかを手探りしたり、あるいは生きているいまの世を過去の色あせた衣裳で仮装させる必要はどこにあるか¹³⁾。―は、過去に対する一種のマニフェストである。また41年の『自己信頼』(*Self-Reliance*)に於ても「なぜ記憶の屍を引きずらなければならないのか¹⁴⁾」と、過去の継承を否定する意見が繰り返される。また、後年の『処世論』(*Conduct of Life*, 1860)でも、アメリカ人がヨーロッパに嬉々として行きたがるのを苦々しく思っている。

しかし一方においては、エマソンは過去を捨てきれていない、あるいはヨーロッパの魅力に抗し難いところもある。例えば、『アメリカの学者』の中で、過去を表現しているものの代表である「書物」について、それを神聖視すると有害な暴君となると述べてはいるが、即ち、書物をしりぞけよ、と述べてはいるが、それでは彼自身はどうであったかといえ、彼の叡智の大部分は、ギリシア・ローマ古典、英文学をはじめとするヨーロッパ文学、さらには東洋思想までも、負っている。彼自身は相当な読書家であった。故に、この講演の中でも、用い方がよければこれほどよいものはない、と付加するのを忘れてはいない。3年後1840年の日記¹⁶⁾にも、書物についてその魅力と、あえてそれを軽視することの神聖さとの、相方の意見をつづる。即ち、「豊かなる過去よ！古い書物の一語は、私の想像力にいかに深い感動を与えることか。」という過去の肯定と、「しかし、今日は貧しく、思想に欠けるが、そのような極貧の中でさえ、沁のすばらしい富を軽視せよと命ずるこの直観を、さらにもっとすばらしい可能性を信ずる証拠として、私は聖なるものと考えたい」という、過去へのあえての否定的見方である。そして彼のこの言葉に於てもう一度注意しておきたいのは、現在はやはり「貧しく、理想に欠け」ているという認識が彼には定着しており、もっとよいものが生ずる可能性があるという「信じ」ているということである。換言すれば、期待、あるいは祈りのような切ないエマソンの心情が読みとれるのである。いずれにしても、過去を捨てよ、と主張するエマソンではあるが、その声の裏には、複雑な思いがあるといえる。もう一例あげると、講演『アメリカの学者』のすぐ翌年7月に完成した講演『文学者の倫理』(*The Literary Ethics*, 1838)に於て、過去の利点を生かそうとする発言もしている。即ち、「現在のための本物の生活を過去から引き出す¹⁶⁾」という発言、あるいは「過去の経験を消化し、矯正しよう。そして新しい神聖な生命とまぜあわせるがよい¹⁷⁾」という発言がみられる。つまり、過去を捨てよ、とはいうものの、過去の効用はそれなりに利用する、という考え方であり、過去と完全に断絶しようというものではないのである。

このようにエマソンは、この時期にすでに、即ち、『アメリカの学者』で高らかにヨーロッパに対する自国の知的独立をうたい、自国への自信も深めていたはずの、この時期に、一方では実は、自国の知的貧窮を嘆き、過去を、ヨーロッパを決して抹殺することはできない事実も、充分認識していたのであった。38年10月の日記は、この時期の彼の自信の自覚と喪失とを告白するのに象徴的である。即ち、「弱気になっているときは、ヨーロッパに懐しい思いを馳せ、フローレンスやローマに住めばどんなに嬉しいことかと思う。生氣あふれるときには、このような傾向、このように未練がましく背後を見やる態度を(…)拒み、わたしの義務はわたしのいる場所にある(…)と感じるのだ¹⁸⁾」と。ここでは、ヨーロッパに逃れたいと思う気持ちと、否、やはり己れの仕事はアメリカであるという気持ちとの双方が、日記であるからこそ、本音として述べられている。そこには、『自然論』や『アメリカの学者』での、時代の使命感あふれる若々しい逞ましいマニフェストとは異なった、エマソンの本音がある。

そしてこのエマソン30代での表向きの高らかな自信と、日記に於ける本音、つまり自信への翳りとは、その後どのように展開するかについても付記しておこう。一言でいえば、自信は生涯変わらないものの、やゝ調子を下げ、アメリカ自国民への期待はずれをま

すまず認め、ヨーロッパを見直す見方が表面化したといえる。即ち、例えば53年の日記では「アメリカの制度の方がより民主的であり人道にかなっている。しかし、アメリカの中からは、イギリス人に比べて、より優秀な人、より有能な人も生まれなければ、またより多くの発明、書物、人道的行為も止まれない¹⁹⁾。」と述べ、ヨーロッパへの「長い徒弟時代」が終わったはずなのに、まだヨーロッパに勝る作品を生み出していないことを嘆く。また60年の『処世論』の中のエッセイ「教養」(Culture)でも「過去を未来の中に溶かしこむ」ことを説き、つまり過去を現在どころか未来へもつなぎとめることを説き、また別なエッセイ「運命」(Fate)でも「かつては積極的な力こそすべてだと思いこんでいた」が「いまでは消極的な力²⁰⁾」が半分はあると思うようになったと、自分の中の変化を公に認める。ことに、二度目の訪英後、イギリスへの見方は、大部軟化して、56年の『イギリス人の国民性』(English Traits)では、米英両国間の断絶ではなく、つながりを認めさえするようになる。ところで、1850年代ともなれば、文学の面でいえば、ポー、ホーソン、メルヴィルらが次々の作品を発表して、アメリカ・ルネッサンス期を迎えつつあったわけだが、エマソンは、例えばホイットマンの『草の葉』は賞讃するが、ロングフェローには冷淡で、さらに、他のいま名を挙げた作家達に対しては無知でさえあった。これほどアメリカ独自の文化を求めていたのにそれに気づかず嘆いてばかりいた姿は、何とも皮肉である。そして、過去に対する厳しい見方が、表向きの、つまり公の評論や講演に於ても、軟化してきたことは、エマソンの自国への幻滅や諦めによると共に、常識的、現実的思考、あるいは寛容が、50歳代という年齢によって形成されたからともいえよう。しかし、それも実は30歳代からの本音ともいえる、自信の翳りの延長線上に位置していることが、もう一度確認できる。

それでは、再び37年8月の『アメリカの学者』に戻ると、この講演はどのように評価できるだろうか。これはやはり、ホームズのいう通り、「知的独立宣言」として歴史に残るものである。もちろん幾つかの弱点はある。まず、ここでの自信は、あまりにも強く、空まわりして、その結果、例えば学者や知識人を煽動した愛国主義演説ともいえないか、という偏見に対する批判、次に、そもそも当時のニューイングランド人はヨーロッパ人の子孫であったから、ヨーロッパの歴史や遺産を無視できないという矛盾を彼が充分認識していたかどうか、という歴史認識の甘さに対する批判、さらに、その自己信頼は個人主義傾向が強く、適応範囲は、社会は個人が建設すると考える西部開拓の人々に限られてしまうのではないかとこの普遍化への疑問などなど…、幾つかの欠点を指摘しようとすれば、それも可能であろう。しかし、少なくとも日記など私的な場面では、欧米間の魅力を逡巡しながら迷い、期待と幻滅をくり返し味わっているエマソンを、今、発見した私達としては、これらの欠点はむしろ、逆説的にいえば、長所にもなりうるのである。即ち、彼にはそのような弱点も承知の上で、さらに声高にアメリカ人の自覚を促す必要があったのである。『自然論』や『アメリカの学者』で、現在を探究せよ、自信をもて、と彼が呼びかけるのは、現在の、つまり37年当時のアメリカにないものを、強く、声高に、多少の批判はものともせず、ただひたすら希求しつづけることこそが、当時の時代の使命感にのっとったものであり、時代にインパクトを与えることができるからと、判断したからである。幾つかの欠点をあげてエマソンを批判できるのは、それから150年も経て客観視して

いっているからであり、当時の渦中の人々にとっては、このエマソンの宣言は、どんなに感動的で、勇気づけられたことであろうか。やはりこの宣言は、時の正鵠を射たものである。そしてこの宣言をなした当のエマソン自身は、宣言をしたその日からすでに、アメリカの知的独立がそう簡単には行なわれ得ないことを、新しい国には新しい思想が新しい人々によって形作られるべきだが、それは理想であり、過去、あるいはヨーロッパを断ち切ってアメリカ人が独自で学芸を発展させている例は、具体的にはまだ発見せずにいることを、十二分に自覚していた。

また見方をかえれば、新しい国、無垢なる国が、過去の文明の支配から独立して、新しい文明を築くことは、矛盾を、——つまり、それは一刻一刻過去へと過ぎていく人間の営みによって、新しいこと、無垢なることを、再び染めていくことに他ならないという矛盾を——はらんでいる以上、無垢なる国が旧世界からの知的独立を果たすにあたって、無垢なることをそのまま持続させていくことは不可能であった。「今、ここ」(the Here and the Now) を無垢のままに、つまりにつねに新しさを持続させたままに、旧世界から独立させるのは、不可能なのである。「新しい人間」も、「新しい思想」も、まもなく「過去の干からびた白骨」になるのである。無垢は変貌するのである。しかし、ともかくエマソンの『アメリカの学者』は、自国民に、まずは自国の新しさへの自覚を促したのであった。その背後の、現状及び将来の展望の認識については、今みてきたように、彼自身十分懐疑的な面もあった。無垢なることが成長すれば、変容していくことも知っていた。それ故、新旧両世界の魅力の間を逡巡し、公の自信とは異なった本音も、時折もらし、相反することをいわざるを得なかったのである。アメリカの自己発見は、その最初の高らかなる宣言者にして、すでに、自信のかけり、苦悶があった。

III. トウェインの『^{あかゲット}赤毛布外遊記』

マーク・トウェインの出世作『^{あかゲット}赤毛布遊記』(*The Innocents Abroad*, 1869) は、陽気な田舎者としての旧大陸見聞記である。そこでは、常にアメリカ人であることを意識した眼によって、偏見や先入観にとらわれない客観的な観察が赤裸になされ、そして誰はばかることなく旧世界が批評されている。それ故、アメリカ人の初の率直な旧大陸批評記として評価されている。しかし私達は本章でさらに、無垢なる者がヨーロッパを批評して何を、何を自覚したか、そしてこの書の真の価値は何かを、考察したい。

III.1. 無垢な眼によるヨーロッパ批判

1867年6月8日、32歳のトウェインは、豪華遊覧船クエーカー・シティ号に、65人ばかりの同勢と共に乗り込み、南欧と聖地への5ヶ月余りの漫遊大旅行に出発した。途中、マルセイユからパリに上り万国博覧会も見物する。その間、旅行先から主にサンフランシスコのデイリ・アルタ・カリフォルニア紙 (*Daily Alta California*) と、さらにニューヨークのトリビューン紙 (*Tribune*) 及びヘラルド紙 (*Herald*) に見聞書簡を寄せ、大反響を呼ぶこととなった。それらをまとめたのが69年の *The Innocents Abroad or the New Pilgrim's Progress* (『^{あかゲット}赤毛布外遊記又は新天路歷程』) である²¹⁾。

まず、題の中の *Innocents* が、象徴的である。まさに、無邪気な、何もまだ知らない無垢な人々、さらにいえば新興国アメリカから憧れの旧大陸や聖地をめぐるうと繰り出していくお上りさん、あるいは無知や愚かさも物ともせず貪欲に吸収していくおめでたい人々のことである。そんな人々がどんな風にヨーロッパを見たか、「正直に書く²²⁾」のが、この書の目的である。トウェイン自身、はしがきで、「自分よりも前に旅行した人たちの眼を借りずに、自分自身の眼で見物して歩くと、どんな風に見るであろうか²²⁾」と、目的意識を明確にする。そしていままでの「他の書物」がしていたように「どんな風に見物しなければならぬか²²⁾」を述べたものでは決してない、と記して、従来の欧州旅行記が旧文明の事象に対していかにコンプレックスをもって見て、感激したり賞讃をくりかえしたにすぎなかったかを暗に擲論し、「自分は公平な眼でみてきた²²⁾」ことを誇りとする。

では、どんな場面で、彼のアメリカ人としての無邪気な観察がなされたか、その例を三つ挙げよう。例えば、パリへ北上する列車の旅についてである。彼によれば、その鉄路500マイルの旅はフランスの魅力たっぷりの一大庭園を貫き、事故は少なく食事の三十分間停車などもあり快適ではあるのだが、「退屈至極」であり祖国アメリカの駅馬車の野趣ゆたかな壮絶味には、到底かなわないと判断を下す。つまり「優雅なフランス」にいながら、アメリカ西部の草原、砂漠、山岳を横切ったときの疾駆に思いを馳せてしまう。そして「おっと、忘れていた」と、ふと我に返り、そもそも、「無味乾燥な汽車旅行と、かの壮絶極まりない夏の北米大陸横断の駅馬車の疾走とをあまりにも侮蔑的に比較することは適切ではない²³⁾」と、反省する余裕さえみせるのである。また次の例としては、アメリカの深山に埋もれているタホー湖の方が、世界的に有名な北イタリアのコモ湖よりも、さらには聖なるガリラヤの海よりも、ずっと魅力的だと祖国の湖に軍配をあげていることである。彼にいわせると従来の旅行記は、はるか聖地までたどりついたのだからと、ガリラヤの海に感激したり、何とかその海の長所あるいは意義を述べたりしている。つまりそれは「真相」を隠していたのである²⁴⁾。しかしトウェインの筆にかかるとは、この海も「美観という点から考慮すれば、タホーの足許にも及ばない²⁵⁾」し、その静寂は、タホー湖のそれが「爽快で魅力的」なのに対して「陰気で嫌悪の念を催さしめる²⁵⁾」となる。さらに興味深い例としては、パレスチナに対する観点である。その空間的狭小と、時間的長さに、このアメリカ人は面くらう。まず、距離感についてであるが、パレスチナが広大なアメリカの国土に比べて、いかに狭く、猫の額にすぎないかということを実感し、縮図あるいは箱庭の中に迷いこんだかのような印象をもつ。救世主は、「アメリカ合衆国の普通の大きさの一州ぐらいの広さの範囲の中で、生活を送り、福音を伝え、奇蹟を行なった²⁶⁾」という事実をまさに実感して気抜けする。そして、「2、3マイル進むごとに、百ページもの歴史をひもといて行かねばならないのは、実にへとへとになる」、それほどに著名な地点が「ごたごたと、くっつきあっている²⁶⁾」と述べる。また、パレスチナの「王」とはいえ、イギリスやフランス王を想起してはならず、大きさは五マイル平方そこそこであり、住人も二千名程度であったと悟る。一方、時の悠久さに対しては、パレスチナの遠大さに眼もくらむ。シケムの家柄は「幾千年の昔まで切れ目がなく」、「たった二百年前の時代が『古代』と呼ばれているような国」アメリカの人々にとっては、「眼がくらみ、当惑を感じるほどの悠久の太古²⁷⁾」までまっすぐにさかのぼれるのであった。広大な国土に新しい

国を建設しているアメリカ人は、パレスチナが、一瞬のうちに見渡せる狭さしかないことに拍子抜けし、一方、歴史の悠久の流れの奥深さにたじたじとなる。

このようにトウェインの対ヨーロッパへの態度は誠に素直な反応の仕方である。そしてその反応を実に正直に述べている。知ったかぶりも、てらいもない。アメリカ人であることをむやみに振りかざしもしない代りに、決して卑下することもない。しかしそれを誇りに思っているのである。実際に旅を了えての「紙上告別の辞」で、こう述べる。「我々はいつも、自分達がアメリカ人だから—アメリカ人だ！—ということをおぼえてもらおうと心がけた。随分多くの外国人が、アメリカの事は今までほとんど聞いたことがないのを知ったときは、(…)旧世界の人々の無智を憐んだが、いささかも自分達の重要さを割引して考えることはなかった。」と。まさに彼にとって旅とは、自分であること、アイデンティティの追求であったわけだが、これについては、次節に於てさらに考察したい。

この無垢なるアメリカ人意識を通して見たヨーロッパ像は、どんなものだったか。それは従来の旅行記にありがちのように「真相」を隠したお世辞ではない。ヨーロッパへの期待と幻滅の卒直なくり返しであった。そして批判を遠慮なく述べつらねた。その例を彼のフランス見聞録から幾つか拾ってみたい。

トウェインのフランス観には3つの段階がある。第一に彼はアメリカ人のフランスかぶれを自国にいる折から苦笑して眺めていたが、次に彼自身にもかの国への憧れはあり、実際に訪れて、素直に喜んでる面もある。しかし、三段階目としてその期待がはぐらかされると、あっさりとかの国を揶揄し、批評する。即ち、まず、洋行が決まった彼は、自分も「大きな世間なみの風潮に」つまり「誰も彼もヨーロッパへ行き」「猫も杓子も有名なパリの博覧会を見にい²⁸⁾」という風潮についに乗ってしまったことを自覚する。そしてフランスかぶれの中には「アメリカ国民全部が荷物を取りまとめてフランスへ移住するのだと思こんでいる²⁹⁾」男さえいる、とユーモアたっぷりに紹介する。とはいえ、彼自身夕暮のマルセイユに入港していく時は「感激にあふれ、フランスを見物したい思いでいっぱいであった！²⁹⁾」し、念願のパリ到着時は「見よ！我々は壮麗なパリに来ていた！³⁰⁾」と思わず叫ぶし、車でパリの街々を駆けぬけながら「ずっと以前に本で読んだおぼえのある物の名や、地名」を見つけては「愉快になり」、例えば「リヴォリ街」と書いてあるのをみても「旧友に出会ったようななつかしさを感じた³¹⁾。」と素直に述べている。しかしだからといってフランスを讚美し続けるわけではない。夢を描いていただけに、失望もあっさり認める。例えば、花の都パリの美容室を期待していたのに、出張理髪師か、かつら製造師のみすばらしい手荒な床屋しかいないことが判明したときの落胆ぶり、あるいは海千山千の案内人が不愉快なこと、ホテルの部屋にはガス灯がないことへの驚き、憧れていたおしゃれな店員さんはどこにもいないこと、フランス語をしゃべってみても通じないこと、等々、期待はずれを、「フランスのべてんを」次々と「嗅ぎ出し³²⁾」ていく。また、有名な「カンカン踊り」にはぞっとして「恥しくて見ていられない」ので両手で顔を覇うが「指のすき間から」ちゃんと観察するのを忘れない。この「馬鹿騒ぎ」をやれやれと見物して「フランスの道徳は、思うに、些細な事に身震いを感じずのような、堅苦しいたちのものではないのであろう。³³⁾」と旧文明の道徳の墮落ぶりをあきれて眺めやる。これらの場面に、好奇心が旺盛でかつ批評精神も存分に発揮するという若いトウェインの貪欲さが

発見できる。この批評の矢は、世の中で秀逸と認められているものにも、遠慮なく向けられている。例えばルーブルの名画に対しても、その画家が「世にへつらい」「愛顧をうけた王侯に嘔吐を催すような追従」が感じられる故「どうも面白くなく、仔細に眺める心地がしない³³⁾」、と容赦ない。

それでは、このように無垢なお上りさんがアメリカ人意識を常に持ちながらヨーロッパをめぐって帰国するとき、彼は何を得るのであろうか。あるいは何を失うのであろうか。次に旅の“成果”について考えたい。

III.2. ヨーロッパ旅行の“成果”：無垢の変容と再生への可能性

無邪気なアメリカ人たちにとって、この旅は漫遊旅行 pleasure-trip であると同時に、副題の示す通りの新しい聖地巡礼を果たす旅であった。即ち、「巡礼者たち」―「聖地大遊覧旅行」ならぬ「聖地大葬儀行進」を遂行するかと見まがうほど荘厳かつこちこちの参加者たち―はもちろんのこと、「罪人たち」―巡礼者たちを嘲笑する遊び好きのトウエインと道中の仲間たち―とて、聖地へ旅することにより、恩寵を得ることを、目的としていた。では、彼らは、ヨーロッパと聖地を訪れて、「救われた」であろうか。期待どおり「成果」は得られたであろうか。答は、道徳的意義の上からいえば「No」であるが、それが不可能であることを知った、という点からいえば、「Yes」である。

聖地に赴いたトウエインが恩寵を得るところか、物質万能社会の文明人であり続けることを苦々しくも実感してしまったことを象徴的に示すエピソードを二つ紹介したい。一つは、憧れのガリラヤの海での値切り交渉による、取り返しのつかない失敗談である。聖なる湖に船を乗り出し、湖のまわりの清らかな土に接吻することが幾千幾万マイルの旅程を重ねた目的であったはずである。しかし巡礼者たちは、現地の船頭に船賃が「ナポレオン金貨二枚」といわれ、「一人か二人、がっかりした顔つきをし」「しばらく、皆、黙っていた」後、誰かが「高すぎる！――一枚なら出そう！」と言った。すると「あつという間もなく、船は沖へ出て、急ぎ去って行く」結果となる。「たちまち泣声と歯ぎしりの音が仲間うちに聞こえた」が、もう取り返しはつかない。船頭たちは、「船賃が高すぎると断定した巡礼者たちにはもはや一瞥もくれなかった³⁴⁾。」この値切り交渉をしようとして置き去りを食う「巡礼者」は、まさに、十九世紀の物質社会の文明人ゆえに、実業人根性を捨てきれずにいたのである。地球半周の旅と疲労を重ねてきたのにもかかわらず、勘定という感覚にこだわっていたのである。めっき時代の思考をこの後に及んでまで暴露するのである。もう一つの例は、エルサレムで「身内である」アダムの「墓」の前で、感動に泣き伏す場面である。作者はその直前、「神がアダムを作り給うた時の塵がここで取られたという事実」に対して、また「人類の父アダムがその墓に実際埋められている³⁵⁾」という事実に対して、それぞれ、そうでないということが、未だ証明されていないのだから、そういうことにしておこうという、やゝ皮肉めいた言述をなしている。即ち、信仰に対して、理性的あるいは現実的な判断を応用しようとするかのごとくである。しかし今度は、「墓」の前になると、自らの物質文明下の思考に気づき、それをかなぐり捨てようと試みる。ところがそれも不可能である。「私は、彼に会えるような時代に生まれ合わさなかった³⁵⁾」と、過去と現在の断絶を前に、なす術もなく、ただただ、涙を流すのみである。エ

デンの園は閉ざされたままであった。

このように、聖地にたどりついてさえも尚、打算的な見方を捨てきれないでいる人々にとっては、アダムの墓の前でいくら涙しても恩寵は得られないし、ガリラヤの波のささやきに聖書の物語を聞くことすらできなかつたのである。道徳的な救いも、また、その気分を味わうことすらも、かなわなかつたのである。ここに、無垢なお上りさんであつたはずなのに、つまり敬虔な巡礼者であつたはずなのに、自分達が、すでに、物質文明の申し子となつてしまつていたことを、あるいは知識を備えてそれに染まつてしまつていたことを、いやがおうでも、自覚する結果となつたのである。

こうして、無垢な者として始まつたはずの彼らの旅は、すでに無垢でないということを知り、自覚して、終つた。しかしそれは同時に、無垢が変容したということを知り、自分達は知識を身につけてしまつていたことを発見する。トウェインは、旅の最後に寄せた「紙上告別の辞³⁰⁾」で改めて述べる。「今度旅行した先々、外国の人々は、実に、実に無智であつた。(…)ヨーロッパについては、たいして興味をひくものはなかつた」と。即ち、アメリカの田舎者が憧れのヨーロッパへ上つていったが、たいした収穫もなく、むしろ自国への誇りを再発見して、帰着した。ヨーロッパを、聖地さえをも、批評の対象として、そこで彼と我との知識を常に天びんにかけながら、結局のところ、自分という意識を取り戻して、あるいは再認識して帰還したのである。故に、無垢は変貌してしまつていたものの、そこには新たな自己を発見する可能性を持っている。アイデンティティを求め続けるために必要な、自信は失なっていない。即ち、再生への望みがある。即ち、そこから、新たな旅へと出発していく活力の源は、得ているのである。逆説的な意味での「成果」を充分に得たのである。だからこそ、「素晴らしい巡礼の旅は終つた。今、心からなる喜びを以て、旅に惜別の念を覚え、楽しい回想に耽つているとすることができる」と述べるのであつたのである。だからこそ、トウェインは、また次の旅へと出発していくことができる。

実際、彼の一生は旅の漂泊の連続であつた。若き日の国内放浪から、聖地巡礼、イギリス訪問、1895年の世界一周旅行等々までの旅を重ねた。それは一回の旅の終りごとに充足感を得られず、またもう一度、何かを求めて旅に出ることの繰返しともいえる。しかし、逆からいえば、得られなかつたことを知ることができたからこそ、再び得てみようという希望も生まれたのである。再生への望みが、常に、一生、彼を支配していたともいえる。安定と充足のイメージを、この時の1867年の旅以来、ずっと追ひ求めていたのである。

そして、この書の中の「無垢なアメリカ人」と「ヨーロッパの文明人」という対比は、後に「ハック」と「トム」の対照的テーマとして発展する。田園を求め、自然へ感応し、人間性の裏面に潜む虚偽を看破し、「人間たることが恥しい」とまで歎じるハックと、文明社会の現実を認識し、その因襲やしきたりに忠誠な行動をとるトムとの対比である。アメリカ人として無垢を持ちつづけて自由を求める心と、一方、それだけでは進歩は成り立たないと認識して、勤勉さを自らに課す心とが、彼にとって一生続くテーマであつたのである。そして絶望をくり返しながらも、尚、ハック的世界の実現を願うのは、アメリカの「庭園の神話」と共通するが、それが、出世作ともいうこの *The Innocents Abroad* からすでに、無垢の変容と再生への可能性という観点から、存在していたのである。ここに、

単にユニークなヨーロッパ旅行記という評価を越えて、トウェインの生涯のテーマをはらむこの書の真の価値があるのではないだろうか。

IV. 1875年、パリのヘンリー・ジェイムズ

本稿では今まで、エマソンの講演と、トウェインの旅行記を通して、無垢なるアメリカ人の旧世界との遭遇ぶりを検討してきたが、最後に、小説に於けるアメリカ人のヨーロッパ体験を取り上げたい。このテーマは、例えばホーソンの『大理石の牧神像』(*The Marble Faun*, 1860)の重要な伏線であるが、国際状況の小説 *International Situation* といわれる小説を生涯の課題としたヘンリー・ジェイムズに於て、くり返し取り扱われた。本章では、ヨーロッパ永住を志したジェイムズにとって一番の転換期となった、1875年秋から一年間のパリ滞在に焦点をしぼり、フランス社会に於けるアメリカの作家の夢と挫折、そしてその成果としての小説『アメリカ人』(*The American*, 1877)の中の無垢の変容について考察したい。

IV.1 パリ永住の夢と挫折

ジェイムズは1843年の生後六ヶ月のヨーロッパ旅行以来、アメリカとヨーロッパの各地を交互に暮らした。その間のパリ滞在は、十回を優に越えるが、比較的長期に亙るのが、1856年、75年、82年の折のことである。1856年、少年時のルーブル美術館、あるいは夏のブローニュの森は印象深く刻まれ、晩年70歳にして『少年と他の人々』(*A Small Boy and Others*)に想起される。82年は秋に友人と地方旅行をして『フランスひと巡り』(*A Little Tour in France*)を *Harper* 誌に寄せ、建築を中心にした個人的印象記を残す。

しかし、75年秋、32歳の滞仏は彼の一生にとって、また他のアメリカ人と比しても、特異なものだった。彼はパリ永住の決意を秘めていたのである。数年前に、聖地大漫遊旅行の途中、鉄路北上してやってきた通行人のトウェインらとは違ったパリ体験である。平板なアメリカ社会と単純なアメリカ人に不満をもつ駆け出しのアメリカ作家が、歴史と文化の奥行のあるヨーロッパを舞台に、自分の仕事をしようという真剣さを伴って、パリの地を踏んだのである。その具体的な目的の一つには、ニューヨーク・トリビューン紙に特派員として「パリ便り」を寄せて生活の保証を得ながら、作家として独立を果たすことであり、そしてもう一つには、同時にパリの文壇と親交を結び刺激をうけることであった。しかし、この二つの目的は各々に首尾よく果たせず、彼の夢は破れ去る結果となり、76年の暮にはロンドンに移った。そして彼のヨーロッパ永住の決意は、イギリスを舞台として実行されることとなった。しかしこの一年間のパリ滞在は彼に小説『アメリカ人』を書かせ、失意の一年とはいえ無意味ではなかった。というのは、「通行人」としてではなく自らの作家生命を賭けて、旧世界と対決した真剣な一年であり、彼のヨーロッパ対アメリカの意識に深く影響を与えたからである。それではこの一年間、彼が失意へと致る過程を、先の二つの目的の失敗に重ねて簡単にたどってみたい。

彼がパリへ赴くことができたのは、何といてもトリビューン紙との特派員契約を結ぶ

ことに成功し、生活の保証が得られたからである。それまでトリビューン紙はフランス人アルセーヌ・ウーセと契約しており、ゴシップ記事や雑談などを寄せてもらって一信30ドルの支払であった。ジェイムズならば英語に翻訳する必要もなくその上アメリカ人の眼で見られるという点に興味もあって、編集長リードは一通につき20ドルで月2回のパリ便りを彼に依頼した。第一信は75年10月25日付であった。好きな題材を好きに書いてよいということでジェイムズは喜んで仕事を始めたが、早くも一ヶ月のうちに自信を失い、家族への手紙の中に、失敗作ではないかという不安や題材選びの苦労をもらし始める。実際、「パリ便り」ということで彼は、音楽（ことにオペラ）や文学を主に紹介していくが、その眼はレポーターというよりも芸術家の眼ともいべきものであり、文章も格調があり文学作品のようであった。一言でいえば新聞むきではなかった。それは、リードの言葉を借りれば「良すぎた」(too good) のであった。そこから、特派員と編集長の思惑に相違が生じ始めたのである。契約の破局は翌夏のジェイムズの賃上げ交渉をきっかけに訪れた³⁷⁾。即ちジェイムズはこの新聞の仕事に悩まされながらも、一方では小説家としての誇りは高まってゆき、76年7月25日編集長に、前任のウーセ並みの一信につき30ドルを要求した。しかし、アメリカの友人と共に休暇を過ごしていたヴァレンヌの彼のもとに届いたアメリカからの返事は予想外のものであった。即ち、「もう少し短く」「回数も減らし」という量についての注文ばかりか、もっと“newsy”で多様性に富み、巾広い話題のものを望むという、内容についてまで要求を出し、加えてジェイムズの「パリ便り」は新聞というより雑誌の仕事であると述べてきたのである。もちろん、編集長は、米国では選挙期間中のため読者の関心が海外便りから離れている、あるいは、読者はもっと一般的な話題を求めている、といったトリビューン紙の読者側の意向という形はとっていたものの、文学者の自負心をもった特派員にとっては、その内容の変更を求める手紙は誠に心外であった。8月30日付でジェイムズは編集長に、自分は注文通りには書けないから、後任を捜してくれるよう返事をする。彼の「パリ便り」は、76年8月26日を以て終了する。芸術家の彼には、新聞向きの仕事はできなかった。以後、彼は生涯二度と新聞のために筆をとることはなかった。但し、ここでの新聞掲載経験は何と20年後、*The Next Time* の中に於て、芸術家とマスメディア、あるいは芸術家と報酬というテーマで再現されることとなるという後日談も生むが…。いずれにせよ、ジェイムズは76年秋以降、パリにとどまる必然性はなくなった。このトリビューン紙との契約停止は、見落とされているが彼のフランス滞在の切り上げの重要な原因である。

ジェイムズのパリ滞在を失意のうちに終わらせたもう一つの理由、それは、よく指摘される通り、フランス文壇特有の排他性と、彼のピューリタン気質によるフランスへの非適応性であった。先輩の国籍放棄者ツルゲーネフと親交を結び、フロベール、ゾラ、モーパッサンなどにも接し、小説技法の面でも刺激を得ることが多かったなど、もちろん、ジェイムズにとって幸いな面も多いこの一年であった。実際、76年5月末ハウエルズへ宛てた手紙³⁸⁾で「私は古くからの満ちたりたパリっ子になりつつあります。パリの土壤に根をおろし、その根がからみあって生長して、その土地に根をはるのに任せているといった気持ちです」と述べ、ツルゲーネフやフロベールとの交遊を嬉しそうに語る。しかし、同じ手紙で断言するには「文学者同志の交際に意義を見い出すことはほとんどありません。私

が彼らと親しくならない理由は無数にあります。」と、7月末、兄のウィリアムへは「パリからは何も重要なものを得ませんでした³⁹⁾」といて、渡英の希望を語っている。彼にしてみれば、フランス社会が彼に門を開かなかったのであろうが、逆からいえば、あるいは現実的な見方をすれば、フランス文壇が、フランス語は上手だがたかが32歳のアメリカから来た駆け出し作家に、本人が期待していたほどの才能を認めなかったのである。パリの文学サークルでは彼は傍聴者の席しか与えられなかったのである。そこで彼はロンドンに渡り、結果としてこの国で名声を得ていく。『ディジー・ミラー』を書いて、2年以内のうちに、社交界の花形作家となるのである。

しかし先にも述べたように、この一年間は、無意味ではなかった。この間、書き続けていった小説『アメリカ人』の中で、腐敗したフランス貴族社会と、アメリカ西部出身の無垢なる野蛮人とを対決させた。ちなみにこの『アメリカ人』がハウエルズの『アトランティック・マンズリー』に掲載されたのは76年6月から77年の5月までの12回分、一年間である。彼がパリからロンドンへ76年暮に移れたのも、この契約による生活の保証があったからである。また、徹底してフランス社会を批判していた部分が、その渦中にあった時期に書かれ、主人公に貴族への復讐を思いとどまらせて、次節で考えるような新たな無垢へと発展させた結末は、フランスを離れてロンドンで落ちついた生活を送った時期と重なることも興味深い。では、ジェームズにとっての転換期の一年間の“成果”ともいえるべき、この作品に於て、アメリカ人とフランス社会はどのように対比され、アメリカ人はいかに変貌するか、次節で考察したい。

IV.2. 『アメリカ人』に於ける“新たなる無垢”

ジェームズは旧世界の因襲社会に飛びこむ無垢なるアメリカ人に、Newman (新しい男) という象徴的な名前を与えた。36歳にして巨万の富を蓄積しながら、不正や汚れを知らない、純粋で、肉体的にも精神的にも健全な「偉大な西部の野蛮人」が、「この哀れで衰え果てた旧大陸をしばし眺め、それからさっと襲いかかり⁴⁰⁾」にやってきたのである。そしてヨーロッパ文化の精髓を求めればかりか、「一番美しい女性」と結婚して「多くの成功を完全なものにし⁴¹⁾」ようとする。この主人公の特徴としては一つには、この野望ともいえる彼の願いに対する自信の深さである。それはただの大言壮語ではない。そこには、後進国から脱しつつある1870代アメリカの国家的成長を背景に、エマソンのいわゆる「個人の無限大」といった己れへの自信が、痛快に顕在化している。上昇中の新興国アメリカから旧世界に乗りこませるには、理想的な人物の「新しい男」である。しかも第二の特徴として、彼は貪欲ながらも素直な心は忘れない。砂に水がしみこむように、何でも吸収していこうという探求心がある。ホーソン論の中で、他国、ことにイギリス、フランスにあってもアメリカの生活構造に欠けているものとして、有名な「ないないづくし」を連らねたジェームズにしてみれば、この主人公に対して自らの知識欲や征服欲の欲するままにすべてを素直なものにしてほしいと願っていたに違いない。結果として傍若無人でも悪気はないのが、彼の貪欲さである。そしてこの素直で清新さをもっていながら、第三の特徴として、西部の男ゆえの、ニューイングランド気質からの解放も指摘できる。ジェームズは前作『マダム・ド・モーヴ』でアメリカ娘の禁欲主義的な純真さがヨーロッパから

何も学ぶことができない様を、いわば“こわばった無垢”を描いたが、このニューマンには、人生と芸術を自由に享受できる適応性を与えた。

一方、旧世界を代表するのは、パリの古い名門ベルガルド家である。この一族は由緒ある家系を誇るが頹廢した因襲の呪縛に閉ざされている。そしてその美貌の娘クレールにニューマンは理想の女性をみて結婚を申し込む。一家は経済的理由から一度は結婚を許すものの、「商売人」との縁組は許さないと再び門を閉ざし、当のクレールは自らの意志で修道院に入る。ここでジェイムズがフランス社会に与えた特徴は、道徳的腐敗の相と貴族階級の極端なまでの民族的矜持と伝統への執着、さらには彼らの人間的な冷酷さであった。彼のこうした手厳しい批判の裏には、先に述べたような彼自身の失意のパリの一年が存在していることは無視できない。しかし他方では、ニューマンにヨーロッパの絵画や建造物を見物させ自由に鑑賞評価させているという点では、そしてそもそもヨーロッパ文化を吸収しようと渡欧させたという点では、ジェイムズの先の「ないないづくし」の裏返しとしてのヨーロッパ評価が鮮明にでている。即ち、ジェイムズは旧世界の文明諸項目は肯定するが、その伝統ゆえの因襲、あるいは偏狭の態度、人間性の墮落を否定するのであった。

それではニューマンと因襲社会との対決はどうなったか。結婚を断わられたニューマンは、一家への復讐の機会を入手するが、突如「断念」してこの小説の幕は閉じる。それは、彼が「精神的宙返り (somersault) をして、すべてのものが違った様相を呈しているようにみえてきた⁴²⁾」から、つまり復讐が「馬鹿な振舞⁴²⁾」にみえてきたからである。こうして、彼はクレールを妻にできないという点で外見上はフランス貴族社会に敗北を喫するが、復讐などという馬鹿な振舞をせずに道徳的勝利をおさめることとなる。

ところで、この復讐の突然の「断念」という、不可解ともいえるニューマンの態度に、この小説に於ける“無垢の変容”と、さらには作者の舞台操作の停止というジェイムズの新しい技法がみられる。というのは、ここでは復讐計画の放棄の理由が、明らかにされていないからである。まず、“無垢の変容”についてである。主人公は復讐をすれば旧世界の悪を裁ける反面、自らも彼らと同じ悪のレベルに墮落することに気づく。即ち悪の深淵へのがけっぷちでの「宙返り」をする。そしてこの「宙返り」のおかげで善なる世界にとどまることができた。しかしその善なる世界での主人公は、アメリカを発ったときそのままの「新しい男」の姿かという、そうではない。先の特徴のうち、自信は諦念へと、また素直なる貪欲は「自制心」へと、という具合に、明快な「西部の野蛮人」は陰影のある大人へと成長し、その上、清教徒的とまではいわなくとも、やはり善なる世界にとどまってアメリカ人らしいまじめさを保持していることに気づくのである。それだけではない。彼の精神状態は来欧時の明快で平板なものから、どこか落ちつかない、不安定なものへと、しかし「自分で自分のことを考えねばならない⁴³⁾」という“再生”を意識したものへと、変容した。こうしてニューマンは、ヨーロッパの貴族社会との対決という“経験”によって、その本来の姿を打ちのめされたのではなく、次への新たな成長をうながされたのであった。

しかしそのきっかけは「精神的宙がえり」という記述だけで、謎のまま、あるいは、主人公にも作者にもそして読者にもわからない、不条理ともいべき精神状態である。換言すれば、これらの3者に於いてすべての判断機能が停止してしまったのである。「宙返り」

ならぬ“宙づり”のまま、地に足はついていない状態である。主人公はあっさりと復讐の証拠を火にくべ、作者は、舞台操作を放棄して隠れ去る。残るは宙づりにされたままの読者である。換言すれば、作者にとり残された読者は、自らの力で宙づりの状態から脱しなければならない。つまり結末の最も肝要な部分の理解は、読者にゆだねられている。作者と読者の新しい関係である。ここに、ジェームズの小説での新技法が発見される。そして私達はもう一度、この小説が書かれたのが、あの失意の一年——芸術家の自由とはすべてを描きすべてを暴露することとされていたフランスレアリズム文壇の中に身を置き、それに反発していた失意の一年——であることを想起しよう。すると、ここでの彼の“描ききらない”という作者の自由もうなづくことができるし、そこから、不条理の世界あるいは視点の方法の小説の先駆者ジェームズが誕生していく、という意義を、彼の1875年—76年のパリ滞在に見い出すことができるのである。ジェームズ自身もニューマンと同じく旧世界を体験し糧を得ていたのである。

以上、十九世紀中葉のアメリカの作家が旧世界といかに取り組んだかについて——即ちまず旧世界からの独立を声高に願ひ、次にそれを自分の眼で批評し、さらに、そこに飛び込んで己れの成長の糧としていくという、様々な彼らの葛藤ぶりについて——考察した。そして、彼らは葛藤しながら同時に、「庭園の神話」の存在を信じたいとは思ふものの、ヨーロッパと対面することにより無垢なるアメリカが変容していく現実にも、気づいていたことを明らかにした。アメリカにとってヨーロッパとどう対処するかという問題は古くて新しい課題であるし、ことに作家にとって、その自己確立と密接に関わっている。その意味で、ジェームズの次の言葉を引用しながら、本稿を閉じたい。

ヨーロッパの作家のうち、誰一人としてアメリカの作家である自分に置かれているような、おそるべき重い負担は要求されない。多少の差はあれ、アメリカの作家はたとい真似ごとであれ、ヨーロッパのことにあたらねばならない。それと同じ意味でアメリカのことを処理しなければならないヨーロッパの作家はいないからである。

注

- 1) Alexis de Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique, Oeuvres complètes*, (éd. sous la direction de J.P. Mayer) t. I, vol. 2. pp. 60-65
- 2) Philarète Chasles, <De la Littérature dans l'Amérique du Nord> dans *Revue des deux mondes*, 15 juillet 1835, t. III. p. 195.
- 3) Phillip Freneau. "The Rising Glory of America", "The Pictures of Columbus" in *Masters of American Literature*, vol. I, ed. by A. Pochmann (The Macmillan Company, New York, 1949) p. 204, 5.
- 4) Ralph Emerson, *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, (Centenary Edition), 12 vol. (Houghton Mifflin, 1968) (以下, *Works of Emerson* と略す.) I, p. 81. (尚, 訳文は, 酒本雅之『エマソン論文集』(岩波文庫, 1976)を参照させていただきながらの拙訳である.)
- 5) *Ibid.*, p. 114.
- 6) *Ibid.*, p. 113.

- 7) もっとも、後年、48年と72年の英国旅行後は、ヨーロッパを肯定する意見もあり、やゝ調子が異なってもくる。
- 8) 30年代、南部リッチモンドでは、ポオが『南部文学通信』で活躍を開始し、ニューヨークでは、『イヴニング・ポスト』の編集はブライアントが、また41年からの『ニューヨーク・トリビューン』の主宰はグリーンリーが、というように清新活発な動きがみられた。それに対し、ニューイングランドはエマソンの警告にも関わらず、その後ローウェル、ホームズ、ロングフェローらのいわゆる巨匠が文壇を支配していった。
- 9) ホームズは、*Ralph Waldo Emerson* (Houghton Mifflin, Boston, 1885) pp.107-115の中で、『アメリカの学者』について言及するが、まずローウェルのエマソン講演評を引用し、それから有名な“our intellectual Declaration of Independence”という評価を与える。
- 10) *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* (以下 *Journals* と略す) (Harvard University Press, 1960～) vol. 5, p. 210-11.
- 11) *Ibid.*, vol. 7, p. 24.
- 12) *Works of Emerson*, vol. 3, p. 37-83.
- 13) *Ibid.*, vol. 1, p. 3.
- 14) *Ibid.*, vol. 2, p. 57.
- 15) *Journals*, vol. 7, p. 488.
- 16) *Works of Emerson*, vol. 1, p. 162.
- 17) *Ibid.*, p. 175.
- 18) *Journals*, vol. 7, p. 118.
- 19) *Ibid.*, vol. 13, p. 121.
- 20) *Works of Emerson*, vol. 6, p. 15
- 21) この書には、ニューヨークのハーパー兄弟社 (Harper & Brothers Publishers) 版とその後のロンドンのチャット・ウィングス社 (The Chatto & Windus) 版があり、副題の有無、章区分の相違などの異説がある。本稿では1902年のロンドン版を使用した。尚、翻訳は岩波文庫、浜田政二郎訳を参照させていただいた。邦題『赤毛布外遊記』も、浜田氏の訳が文学書等で定着しているので、それをういた。
- 22) Mark Twain, *The Innocents Abroad, or the New Pilgrim's Progress*, (Chatto & Windus, London, 1902), preface.
- 23) *Ibid.*, Chap. XIII, p. 87.
- 24) *Ibid.*, Chap. XLV III, p. 472.
- 25) *Ibid.*, Chap. XLV III, p. 469.
- 26) *Ibid.*, Chap. XLV II. p. 464.
- 27) *Ibid.*, Chap. L II. p. 510.
- 28) *Ibid.*, Chap II. p. 8.
- 29) *Ibid.*, Chap. X. p. 72.
- 30) *Ibid.*, Chap. X II. p. 91.
- 31) *Ibid.*, Chap. X II. p. 92.
- 32) *Ibid.*, Chap. XV. p. 124.
- 33) *Ibid.*, Chap. X IV. p. 113, 114.
- 34) *Ibid.*, Chap. XLV II, p. 460.
- 35) *Ibid.*, Chap. L III, p. 524, 525.
- 36) *Ibid.*, p. 606.
- 37) Reid と James の往復書簡は、Henry James, *Parisian Sketches, Letters to the New York Tribune* 1875-76, ed. by Leon Edel & Ilse Lind, (Rupert Hart-Davis, 1958), p. 216-220を参照

した。

- 38) To W.D. Howells, May 28 th 1876, *The Letters of Henry James*, ed. Percy Lubbock, (NY. Scribner's 1920), vol. I, p. 47-50.
- 39) To William James, July 29th 1876, *Selected Letters of Henry James*, ed. Leon Edel (London, Rupert Hart-Davis, 1956) p. 76-p. 79
- 40) Henry James, *The American*, Signet Classic (New American Library, 1980) p. 32.
- 41) *Ibid.*, p. 35.
- 42) *Ibid.*, p. 305.
- 43) *Ibid.*, p. 321.

(平成元年 12 月 22 日受理)